

二、名高商の教育と研究

◆学科構成

この章では、大正期から昭和初期を中心に、名高商の教育と研究について紹介します。

名高商では、三年間の本科が基本となります。これに加えて一九二四（大正一三）年、商工経営科（修業年限一年）が設置されました。なお、商工経営科新設に要する経費は、文部省は負担しないという条件を容れ、これも県からの寄付でまかなわれました。同科は、設置時の説明書によれば、地域の産業振興に必要な、企業経営に関する最新の学理や実験に通じた人物を養成するものとされています。つまり、地域の経済界をなう人材が望まれていたわけです。

◆カリキュラムの概要

カリキュラムを概観しますと、第一学年とそれ以後とで、受講科目がかなり異なっていることが分かります。

第一学年では、簿記や商業通論、商業地理、商業数学など、基礎的な商業科目に加え、国語



(館員高加) 室教一タイプライター及室験賞品商 校学高商等高級名

商品実験とタイプライター室（「名古屋高等商業学校絵葉書」）

や法学、経済学、数学、理化学などの、教養科目にもかなりの時間を割いていることが特徴です。そして第二学年以降で応用的専門的な商業科目に進むという構成になっています。また三年間を通じてですが、英語を中心とする外国語の授業が多いことも目につきます。

経済人の卵である高等商業学校の学生に、教養豊かな紳士としての風格を求めるのは、渡辺校長の教育方針の特徴でした。

◆特色ある商業教育

しかし高等商業学校ですから、専門的な商業教育がその中心であることは言うまでもありません。

初代校長の渡辺龍聖は、これまでの商業専門教育では重視されていなかった、名高商が大きい

な成果を期待する科目として、商業実践、商品実験、商工心理、能率研究などをあげています。商業実践は、銀行業、保険業、倉庫業、運送業などの模擬会社をつくって実習するものです（擬営実践）。一九二五（大正二四）年に竣工した特別教室はそのための施設ですが、のべ建坪三九六㎡、鉄筋二階という当時としては立派なものでした。

商品実験は、商品の製造やその取り扱い、品質鑑定などを目的とした、科学的な実験です。一九二二年四月に商品実験室が開設され、そこでこの授業が行われました。

もともとこれらの多くは、すでに渡辺校長が小樽高商時代に本格的に導入していたものです。しかし、例えばケースメソッド教授法は、日本の高等商業学校では初めての試みです。これは、ある実例（ケース）について学生に自由討論させる方式の授業で、名高商では株式会社の設立に関するケースが毎年学生に課せられました。

◆商工心理学

商工心理学も、名高商で初めて本格的に導入された学科目です。

これは、商品の生産や販売、購買に関わる人間の適性や心理を研究するものです。この科目を採用した理由について、渡辺校長は次のように語っています。



商工心理学実験（名大経済学部提供）

今までの経済学者は資本のことのみを研究して人のことは哲学者の解剖のままに任せて置きました。然るに哲学者はまた資本嫌で、金銭から人を切り離して架空的に人をおもちゃにしておりました。然るに前世紀にフェヒナーが物理の法則を心理に応用して以来、実験心理が現れ、それが今日の商工心理の基となりまして、それが欧米の産業界に適用せられ出したは欧州大戦以後のことであります。

（『乾甫式辞集』五九頁）

欧州大戦とは第一世界大戦（一九一四〜一八年）のことです。この学科は、まさに経営学の最先端を取り入れた名高商の目玉であったといえるでしょう。

また渡辺校長は、この商工心理学の採用によ

る将来の夢を次のようにも語っています。

…近き将来には松坂屋の入口に我校の卒業生が巧たくみなる心理機械をすえ付け、御客がドーアをあげると、「ア此御客このさんは婚禮の調度に入らしたのである、三階の御祝儀調度室に御案内…ア此御客さんは今晚の来客に食糧品購入に入らした、地下室に御案内…」と云う時が、近い内に来ると信じて疑いませぬ。近いと云うても百年後かも知れませぬ。

（『乾甫式辞集』六〇頁）

今から二〇年後に、このような「心理機械」ができるかどうかは別として、こうした消費者の心理を重視する考え方は、今や常識となつていると言つてよいでしょう。

◆名高商の二大信条

次に、渡辺が確立しようとした名高商の校風を端的に示すのは、やはり「二大信条」ということになるでしょう。毎年の入学者に示された、名高商の基本教育方針です。それは、「学生は学生らしくあること」、「学生は学生の本分を忘るるな」というものでした。

学生らしく、というのは、具体的には髪型や服装、言葉使い、行動などが学生らしいという



渡辺龍聖

意味であり、髪型では「五分刈り頭が学生にふさわしい」とされました。そして学生の本分とは、「入学の目的を忘るるな」という意味で、病気など不可抗力の理由以外では、決して授業に欠席しないこととされました。一九三〇（昭和五）年からは、「学校は家庭の延長なり」、「学校は生徒の健康保護所なり」という「二大要望」が加わっています。

渡辺は、これらを規則や命令ではなく、学生の自発性によつて実現しようとした。教育は個性の違いを尊重しなければならず、共通の規則で束縛するは好ましくないので、できるだけ規則は制定しないようにすると述べています。

ただし、例えば五分刈りは、規則にはなっていないようですが、渡辺校長の強い意向により事実上の不文律になりました。二大信条がどのくらい徹底されたかは、『剣陵十周年史』（一九三一年刊）の次の文章が物語っています。

：渡辺校長のモットーたる学生らしくの趣旨は、限なく行き渡り、頭髪の五分刈り以下は全く生徒の慣習となり、注意を受くる者としてなく、其の他、苟しくも学生に相応しからざる言語動作風采等は見んと欲するも見出す能わず。日々の授業出席率は常に九十八%

以上にして、全国高等専門学校中の驚異とせられ、年々の皆勤者優に二百名を算し、卒業式毎に皆勤賞を授与さるるもの百名に垂んとす。
(九五頁)

◆人格主義と商業教育

渡辺といえ、その人格主義教育が有名です。そしてそれは、商業とも深い関係を持つものと考えられていました。例えば渡辺は、一九二二(大正一一)年の『学友会誌』創刊号の巻頭文「商人と人格」で次のように書いています。

今日の商人は、ただ徒らに算盤や文書を好くするのみでは駄目である。人格高く修養円満にして然も才能あるものでなからねばならぬ。

それでは、なぜ企業経営者はそうあらなければならないのか。渡辺は続けて、

…今や華府會議の結果、軍備縮小が行われ、世界各国は商業に向つて集中されているのである。此れからは商戦の時代である。過去に於ては軍人が国威発揚のために戦つたのであるが、今日は商人が軍人に代つて戦わねばならない。

と述べています。第一次世界大戦後を国際経済競争の時代ととらえ、国家のために産業戦士として戦う人材となることが求められていたのです。

◆教員の特徴

次に、こうした渡辺校長の教育方針の下、名高商で教鞭をとった教員たちについて簡単にふれておきましょう。

教員の特徴は、第一に、名高商のカリキュラムの特徴を活かすため、渡辺校長がそれにふさわしい気鋭の教員を集めたことです。教養科目だけでなく、専門科目の授業を、商業学や経済学以外を専門とする教員が担当していたことが注目されます。

例えば、商品理化学・商品実験を担当した小原亀太郎の専門は理学ですし、これも商品実験担当の近藤良男は、東京帝国大学を卒業してすぐに名高商に赴任してきましたが、薬学を専門としていました。商工心理学の古賀行義は心理学を修めた人です。

◆外国人教師

第二の特徴は、多くの外国人教師がいたことです。授業開始二年めには、早くも五人の外国

人教師が赴任しています。以来、大正期から昭和初期を中心に、のべ一七人を数えました。多くは外国語担当でしたが、商業関係の専門科目を受け持った教師もいます。

しかもその中には、E・F・ペンローズ、A・アシュトンなど、著名な経済学者もいました。彼らは、来日中にも積極的な研究を行い、名高商の研究活動にも大きな貢献をしています。またG・C・アレンは、イギリスへの帰国後、日本での経験を出発点にして日本経済を研究テーマにしました。戦後は、日本の経済発展のための好意的な助言や、日英文化交流などに尽力し、勲三等旭日中綬章と国際交流基金賞をうけています。

◆産業調査室と赤松要

名高商は研究活動も非常に活発で、しかも大きな業績を上げていたことは特筆されるべきでしょう。その代表的なものとして、産業調査室の設置とその研究業績があげられます。

この産業調査室の中心になったのが赤松要^{かまろ}です。赤松は、神戸高等商業学校（現神戸大学経済学部・経営学部）、東京高等商業学校（のち東京商科大学から一橋大学）専攻部を卒業し、一九二一（大正一〇）年、開校直後の名高商に講師として赴任しました（翌年教授に昇格）。時に二六歳の若さです。以後、一九三九（昭和一四）年に東京商科大学へ転ずるまで、一八年にわたって名高商で勤務しました。戦後には、雁行形態論や金廃貨論で著名な、世界的な国際



渡欧当時の赤松要（左から二番め、『学問遍路』より）

経済学者として活躍しています。

その赤松は、一九二四年から二六年にかけて欧米諸国に留学しますが、特にアメリカのハーバード大学で大きな触発をうけて帰国します。そしてさつそく渡辺校長に対し、産業調査室の設置を進言しました。渡辺は、言下にこれを承認したといえます。そもそも、赤松にハーバードへ立ち寄るよう命じたのは渡辺ですから、そうなるように計算していたのかもしれませんが。

◆名高商生産指数

そして一九二六年、小さな組織ではありませんが、電動式計算機などの最新機器を備えた産業調査室が発足しました。赤松はその主任となり、宮田喜代蔵、郡菊之助、酒井正兵衛各教授を構成員とし、外国人教師ペンローズもスタッフに

加わっていました。

ここでは、資料の収集による重要産業の経営調査、最新機器による景気循環の実証研究、ハーバード式ケースメソッドの研究などが行われました。そして一九三三（昭和八）年には、四〇年近くもの長期間を対象に、日本の全生産物を網羅した生産指数を発表します。これは日本で初めてのものであると同時に、世界的にも注目された最先端の業績であり、「名高商生産指数」と呼ばれました。

産業調査室は、敗戦後の一時中断をへて、一九五〇年に名古屋大学経済学部で再発足し、五年には経済調査室に改組されています。そして現在は大学院経済学研究科附属国際経済動態研究センターとなり、その実証主義の伝統を現在に伝えていきます。

◆ 「名古屋高商は大学だ」

このように、名高商の教員による研究活動はきわめて旺盛でした。そうした研究発表の場として名古屋高等商業学校商業経済学会が設立され、その機関誌として一九二三（大正一二）年に創刊されたのが『商業経済論叢』です。渡辺校長は発刊の辞で、専門教育機関が社会から隔絶している時代は去り、さらに教育機関が「特殊階級」にかたよれば社会の堅実性が失われるとして、教育と社会の結合を説いています。



『商業経済論叢』（名古屋大学附属中央図書館所蔵）

その他にも、一九三二（昭和七）年には、商業美術研究会から『商業美術論集』が創刊されました。商業美術とは、商品の広告や宣伝、ライトアップなどの効果的なあり方を、消費者心理などの分析によって研究しようというものです。当時における最先端の研究分野でした。さらに産業物理学教室、応用生物学会などというものまでありました。

赤松要は、名高商を去つてまもなく、学友会機関誌『劍陵』に寄せた文章の中で次のように書いています。

劍陵を離れてみて劍陵の価値がわかる。北陸の畏友O教授は名古屋に来るたびに『名古屋高商は大学だ』と言った。それは決して御世辞だけではない。実際に劍陵学園は商業経

済の単科大学にあたるのみではなく、総合大学として偉容を有することは全く驚異に値する。名高商は単なる専門学校の枠をこえ、すでに大学としての内実をそなえていたのでした。

◆「名古屋商業大学」と渡辺校長

そうだとすれば、名高商を大学に昇格させようという運動が起こっても不思議ではありません。おりしも一九一八（大正七）年に大学令が制定され、帝国大学以外にも大学の存在が認められるようになっていました。実際に、早くも一九二四年には同窓会其湛会きたんが、その創立と同時に「名古屋商業大学期成同盟会」を結成しています。ただ同会の活動には不明な点が多く、巨額の基金を有しながら、史料で確認される範囲では目立った活動をしていません。

このことに影響を与えたと考えられるのは、渡辺校長の大学昇格に対する独自の見解です。渡辺は、専門学校を大学の格下と見なす文部省や社会の風潮を批判し、両者は役割を分担する対等な最高学府であると主張しました。大学は理論とその応用を研究し、専門学校は實際を主として、その結果理論に到達するということです。

渡辺は、実践主義、実証主義から結果として理論に及ぼすという、専門学校としての名高商の学風に誇りを持っていたのでしょう。